テクニカルライティング*

梅 木 庸 行**

Technical Writing*

by Tsuneyuki UMEKI**

本視点では従来、それぞれの執筆者の方々の長年に亘る豊富な経験・ノーハウ・哲学について語っておられるようである。

そこへエンジニアとしての経験の少ない筆者に編集委員会から執筆依頼が届いた。まあ何号かに1つくらいは、毒になるかもしれないが薬にはならない話もよからうと思い、軽い気持ちで承諾した。

昭和29年就職難のさなか、阪大工学部溶接工学科を卒業し、恩師の紹介でやっとさる外資系企業に就職することができた。しかし18年勤め、感ずるところあり退職した。以後失業を含み、主として外資系の企業を転々とした。定年退職後、一応一人でテクニカルライターとして働いている。

もともと物を作りたくて、工学部に入学したのであるが、新入社後しばらくの間、アプリケーションエンジニアとしてR&Dからみの2・3の試作品のようなものを設計から試用まで担当したのが、ものづくりの最初で最後であった。以後セールス及びサービスエンジニアとしてのみ働かざるを得なかったのは残念である。ただ、日本で最初のNC大型ガス切断機をさる造船所に輸入・納入・据付出来たのは、今から考えるとセールス及びサービスの仕事とは言え、やりがいのある仕事ではあった。

テクニカルライティング

筆者は特にテクニカルライターとしての専門的教育を受けていないし、また執筆能力の点で問題があるのか、さらに筆者の専門領域が熱切断と工業ガス利用技術とあま

りにも狭い領域に限られていることなどの理由により、テクニカルライティングの仕事が極端に少なく、結局今までに和文の取扱説明書を2回ばかり作成したことがある程度にとどまっている。従ってテクニカルライターと自称はしているものの、殆どが日英翻訳をしている状態である。

少し横道へそれるが、筆者は大学の教養課程での英語の試験で200人中最下位であると告げられたことがある。その位、極めて語学力のない人間が、現在英語で生計をたてている、とは言えないまでも生計の足しにしているのは、皮肉なものである。得意な分野若しくは好きな分野で活躍されておられる方々をうらやましく感じている。

筆者の現在の主な仕事である翻訳の話に戻る。翻訳作業とは、まず原文を完全にその言語で理解し、理解できた内容を、別の言語で表現する作業である。技術翻訳では文学作品の翻訳とは異なり、外国語で表現するには、特に際立った才能を必要とするわけではなく、単に「力仕事」を行っているに過ぎない。

後者の外国語で表現する作業は、用語の知識があるか若しくは対訳用語集が活用でき、ある程度の語学力があれば、誰でも出きる作業である。しかしながら前者の原文を理解するのはさほど簡単なものではない。理由は2つあり、1つは翻訳者が原文のフィジカルミーニングを完全に理解することが難しいことにある。人間であるからには全ての分野に精通することが出来ないし、また技術は日進月歩であるので最新の情報を入手する必要もある。しかしながらこれは翻訳者自身が絶えず切磋琢磨し、多くの知識を持つように努力すればある範囲内で解決する問題である。1つの解決方法としては筆者は自分の専門分野（翻訳の場合はテクニカルライティングよりやや広いが）以外の翻訳は、引き受けないか若しくは詳しく説明を受けるかしている。

他の1つは翻訳者の側では解決できない問題である。即ち原文が判り難いことである。またまた横道に逸れるが、一般に日本人の書いた技術文書は判り難いと思う。原因は色々あるが、第1に、文書の必要性が低かったことを挙げたい。狭い国土に、気心のわかった民族が住んでいて、一々文書に頼らなくても全てのコミュニケーションが容易に取れる状況では文書はさほど重要な地位を占めない。例えばあるユーザで装置が故障したとする。ユーザは取扱説明書を読むよりはメーカーへ連絡するのではなからうか。メーカーの多くは直ちに出張し、問題を解決する。これでは取扱説明書は不要である。例えば広い国土のアメリカではそう簡単にはことは進まないであろう。

第2に現在のようにワープロが普及していない時代には、文書作成作業の中で単純労働の部分が手間取った。手書きすること自体簡単ではない上、それを和文タイプライターで打つと言う大変な仕事をこなさなければ文書は作成できなかった。昔、筆者がフランスで見た光景は、文書を作成するには、ステノに口述筆記させ、タイプ仕

*原稿受付 平成12年7月20日

上げさせ、校正すれば出来あがりという具合で、いとも簡単に大部の書類を作成していた。これは労働の質により大幅に賃金の異なる階級社会で成り立つ手法である。戦後の日本のように階級制度のない国では安いコスト、かつ短い時間で文書を作るのは困難であった。

第3にわが国では技術文書は専門家、主として設計・開発関係の技術者により書かれている。しかし彼らは執筆の専門家では無いので問題が生じる。企業も技術文書の質を重要視していない。筆者が勤務したことのある2つの外資系の本社では、技術文書の作成は専門の部署が担当していた。ここでは非専門の技術者が執筆を受け持っていて、ある執筆主題が決まると、専門家に質問したり、簡単な講義を受けたり、自分で勉強していた。こうして読者の立場で執筆していたので判り易い文書が作成できたのである。

第4に、これが1番の問題点と思われるが、日本の戦後の教育では技術文書どころか、一般に文書を書く教育をしていない。初等教育でも高等教育でも同じである。大学の工学部で文書を書く講義があるなど聞いたことがない。その上「技術文書の書き方」のような通信教育すらない。私も英文の技術文書の書き方の通信教育を受けたことがあるが、日本語では経験がない。多分技術文書を書く能力が高くてでも社会で認められないからではなかろうか。ある新聞記事によると、アメリカのキャタピラ社では英語の書き方の規格を設けているとのことであった。世界各国へ製品を輸出しているのだから、わかりやすく誤解されない文書が必要なのであろう。

第1と第2の問題は歴史であるから無視し、第3の問題についてはその意志さえあればどんな企業でも改善は可能である。第4の問題は当分の間は企業で対応するしか方法がないと思われる。

日本語の技術文書

では日本語原文のどんな点が判り難く、翻訳で苦勞するのか、これはどんな点が読者に判り難いのかと言う点と共通しているので指摘したい。

色々あるが、省略が多過ぎることが1番であろう。執筆者は前述のように専門家であるので、自明の理として省略するのであろうが、訳者なり読者は戸惑う。例えば「運転ボタンを押す。」と言う表現ではそのボタンは何処にあるか判らない。初めて出てきたときは、何処にあるものか説明が必要である。あまり良い例ではないがこの種の省略はかなり多く、訳者は悩ます。時には最後まで読んで初めて判るような記述もある。

また別の例では「・・・漏洩していればその接手を増締めして下さい。」一読して問題はなさそうである。しかし翻訳すると「増締めする」という他動詞の目的が「接手」では判り難い。やはり「接手ユニオンのナットを」「接手フランジのボルトを」と具体的に目的語を示して欲しい。

ただし例えば「可変抵抗器を回すこと」と言う表現は、

省略を含んでいるので注意が必要である。文字通り解釈すると、何処かに取付けてある可変抵抗器を、壊れてもよいから無理やり回すことになる。これは可変抵抗器ではなく、その「つまみ」を暗黙の了解で指していると考えるべきである。屁理屈ではなく常識が必要となる。

次に多いのは全く同じ物に別の表現を使うことである。さきに「車輪」と言い次に同じ品物を「ローラ」と書かれたのでは理解に手間取る。これは名詞とは限らない。動詞でもそのような例がある。

スペイン語とかイタリア語では動詞が人称と数により6種に活用するので、一々主語を示さなくても理解でき、主語は省略できる、いやした方が良くも聞いている。しかし日本語の場合は主語は省略されているのではなく、初めからない場合も多い。もともと日本語とは主語が無くても良い言語であるからであろう。例えば「君は何を飲む。」「僕はコーヒー(1杯)。」「この「僕」は主語であろうか。主語なら英訳すると「I am (a) coffee.」となり、これはまず英語とは認められないであろう。主語ではないのである。しかしながらこのコンテキストでは「僕はコーヒー。」のままで日本語として何ら欠陥を持っていない。ただ技術文書の場合はこれを丁寧に「僕が飲みたいのは一杯のコーヒーです。」と書いてもらわないと理解できない場合が多い。

誤解してはならないのは日本語は論理的な文に適していないのではなく、論理的でない文章も違和感無く書くことができるということである。そこで非論理的な文章が技術文書にまで現れてくる。

ジャーゴン、技術用語とでも言うのであろうか、を使わないことも良い翻訳、理解しやすい文書には重要である。例えば「ガス」はさまざまな意味を持つ。家庭では「都市ガス」、ガス溶接・切断などでは酸素と対比してかつては「アセチレン」いまは「燃料ガス」、山登りでは「霧」、医学では「消化器内にたまった気体」等である。これらは「ガス」というジャーゴンを使わず、正しい用語を使って欲しい。

原文とは無関係に翻訳が難しい問題が1つある。それは可算名詞の数である。通常日本語では数には無関心である。しかし英語では、又多分他の欧州系言語でも単数か複数かが判らなければ文が書けない。単語の最後のsの有無だけではない、冠詞だって考慮の対象になる。翻訳を外注される時単語の後ろに括弧をつけて単または複と記しておくことと翻訳者はその心遣いに感激するはずである。

これらの問題はまだまだあるが、紙数の関係もありこの位にして置く。

このように翻訳しようとする時、原文の欠陥が見付け易い。単に読みなおした場合より遙かに多くの問題点が気がつく。良い技術文書を作成するには翻訳を試みることをお勧めする。時間が無い場合は翻訳外注すればよい。但し日本語の問題点の指摘依頼をお忘れなく。